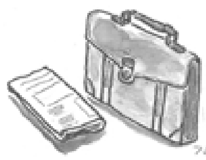
民報 あばしり

NO.1317
5月23日
発行所
日本共産党
網走市委員会
網走市北八西三
℡四三－四四五八
F四三－四四五七



「かけある記」5月17日
投げやりな総理などいらない
前衆議院議員　畠山　和也

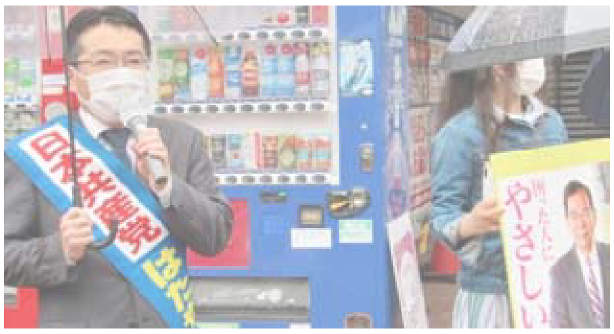
専門家からの意見を受けて菅首相が前夜までの方針を覆し、北海道にも発令された緊急事態宣言。大型連休前から陽性者数が増えていたのは明らかだったのに、「まん延防止措置」も札幌でのマラソンテスト大会が終わるのを待っていたかのようでした。今回の発令でも後手後手ぶりが浮き彫りで、総理の記者会見が投げやりに見えたのは私だけでしょうか。

「せめて在宅で亡くなるようなことが、ないようにしてほしい」。道医労連との懇談で、鈴木緑委員長が絞りだした言葉が胸に迫りました。病院どころか宿泊療養施設にも入れない方が、急速に増えています。とりわけ一人暮らしの方は不安が大きいことでしょう。

札幌市は区役所職員も保健所へ応援に入っていますが、命を守るためにあらゆる手立てを。国は躊躇（ちゅうちょ）せず、必要な財政支援や検査の拡充、そして十分な補償を！

そんな時に国会では、高度急性期・急性期の病院ベッド数を全国で約20万床も減らす法案が審議されています。コロナ禍で苦しむ国民がいる目の前の現実との落差に、政府に対する腹立たしさが収まりません。菅政権は国民の命を守る気があるのか。早く政権交代しなければとの思いでいっぱいです。

5月16日付「しんぶん赤旗」日曜版に、業者への一時支援金の申請について記事が載っています。命やくらしを支えるため日本共産党はがんばります。お困りごとは遠慮なく、ご連絡ください。私もくりかえし国へ訴えます。



赤旗日曜版　5／2号と5／16号
東京五輪　"子ども観戦"
緊急事態宣言中に「下見」強行

東京都内の公立・私立幼稚園から高校、特別支援学校などの園児や生徒の約8割にあたる約81万人に東京五輪・パラリンピック競技を観戦させる―。新型コロナウイルス感染拡大前に立てられたこんな計画が、コロナ禍でもそのまま強行されようとしていることが日曜版編集部の調べで分かりました。

独自の感染対策もなく、ワクチン未接種の子どもたちをリスクにさらす無謀な計画に、中止を求める声が上がっています。日曜版動画再生は40万回にもなっています。

松浦さとし奮戦メモ

全道党自治体部長オンライン会議があり参加しました。緊急事態宣言が出された中での会議となりました。

どこの地域でも新型コロナによって住民の暮らしが大変になり、どうしたらいいのか困って党議員に相談されるケースが増えていることも報告されました。私も昨年から生活苦の相談が、これまで以上に多いので、全国どこでもあるのだろうなと感じていたので、日本共産党議員の役割を改めて実感しました。

私は、3月の網走市議会の当初予算が日本共産党議員団、民主市民ネット、保守系議員3名が修正動議に賛成し予算委員会では賛成多数で可決、本会議では委員長報告に対し賛成討論だけがあり全会一致で議決されたこと、「今後も立場の違いはあっても一致できることで協力していく」と、議員団としての考えを報告しました。

オンライン会議は、コロナ禍では、多人数の会議ができないことから、今後の活動の中心になりそうですね。

村ちゃんが駆ける

13日に白鳥台小学校から今の給食の問題点について聞くことができました。①調理員の休暇取得が代替職員2人体制では難しいこと、②食材の確保が危機的ということ、③食材発注をする養護教諭の負担が大きいことでした。この問題を議論せずに集約化をしようとしていた。集約化は一旦立ち止まって、子どもや親、先生の意見を聞き、教育委員会はこの声に早急に対応すべきです。

また、校長先生はこの4月に赴任されて、網走の給食について、前の学校の給食センターでつくる給食はメニューは多いが、冷凍食品なども多い。しかし、ここはメニューは少ないが手作りで出来ている。麺でもいろいろな具材がしっかり入って「質の高い給食」だとほめてくれました。

児童の様子を聞くと、給食の時間を楽しみにしている。おいしいので喜んでいると言っていました。この声が学校の本当の声だし、この声に応えたいと思います。

流氷

雨の日が多かったゴールデンウィーク。ちょっとした晴れ間に、息子と呼人探鳥遊歩道を歩きました。立ち枯れた葦の茂みの中に、板を並べた一本の道。歩けばぐちゅぐちゅと音をたて、その両わきには水芭蕉。湿地の上に橋がかけてあるところで、私は足を踏みはずさないように、そろりそろりと進みながら、後ろを歩く息子に声をかけました。「学校はどう?」「寮は慣れた?」野鳥のさえずりに囲まれたおかげか、息子はやわらかな笑顔で、するすると日常の様子を話してくれました。4月、彼は初めての土地で不安いっぱいの日々だったことでしょう。野鳥はというと、声はすれども姿は見えず。しばらく足を止めて目をこらすと、いました、いました、近くの木に。目元に黒い線、ゴジュウカラです。「木を垂直に登ってる!すごいなあ。」まるで幼い子どものように、驚きをそのまま言葉にする息子に、私は嬉しさで胸がいっぱいになりました。

かーこ